



たいまつ新書 50

菊池寛の時代

金子勝昭

たいまつ社

著者紹介

金子勝昭（かねこ・かつあき）

1930年生まれ。さそり座。B型。東京都立大学を出て、(株)文芸春秋に就職。まだ勤めている。世の中の仕組みよりは、その仕組みの中で生活している人間の心と形に関心を持っている。コラムと雑文を集めた『片想い文明論』という本を出したことがある。

菊池寛の時代

たいまつ新書 50（青）

1979年1月10日 第1刷発行

定価 680円

著者©	金子勝昭
発行者	大野進
発行所	株式会社 たいまつ社

〒160 東京都新宿区百人町1-23-14

電話 03-371-1590

振替 東京 4-24362

印刷・厚徳社

＜落丁・乱丁本はおとりかえます＞ 直接注文の場合、送料当社負担

たいまつ新書50

菊池寛の時代

金子勝昭

たいまつ社

目次

はじめに.....4

〃通俗小説〃によつて流行作家となり、また文芸春秋社を創立した大御所との出会い

1 逸話の人.....

貧乏、秀才、野放図、無頓着、神経質、不精、そして合理的、現実的な彼の日常生活

2 作家という職業.....

彼はなぜ作家などになろうとしたか。どのようにして作家が職業として成立するのか

3 純文学と大衆文学.....59

日本における特殊な存在である純文学から人生案内としての通俗小説に転換した意味

4 編集者としての能力……………100

人間の興味をひきつけるプラン、座談会と
いう形式などによって雑誌経営に成功する

5 自由主義者の運命……………139

伝統であるよりも気質であつた日本の自由
主義者は結局自由に全体主義を選ぶに至る

6 菊池寛の時代は終つたか……………165

大正デモクラシーから世界大戦終結までの
彼の時代は現代のわれわれに何を残したか

参考文献 172

略年表 181

はじめに

こころみに、日本百科大事典（小学館、一九六三年版）のページを繰ってみると、こう出ている。

菊池寛^{きくち かん}（一八八八—一九四八）本名寛^{ひろし}。大正・昭和の劇作家・小説家。香川県高松市の旧藩儒家に生まれ、いくつか学校を転々としたのち、苦学しながら旧制第一高等学校から京都帝国大学英文科を卒業。芥川龍之介・久米正雄らとともに第三次・第四次『新思潮』同人となり、『屋上の狂人』『父帰る』などの戯曲を発表したが認められず、ようやく小説『無名作家の日記』『忠直卿行状記』（大正七）によって新進作家の地位をえた。その後、啓吉ものといわれる身辺小説や『恩讐の彼方』『藤十郎の恋』などの歴史ものを書いた。一般にこの期の小説はテーマ小説といわれたが、これは封建思想の否定、エゴイズムの追求とともに、作品の内容よりも題材を重んじ、現実主義的な人生観の立場から逆説的な観察のもとに、現実には新しい解釈をしめたものである。『真珠夫人』（大正九）以後は、通俗小説に力を注ぎ、当代通俗小説流行の中心となった。これらの文筆活動のほかに、雑誌『文芸春秋』を創刊し、また『文芸家協会』の設立に尽力するなど、作家の地位や生活の向上につとめて、文壇の大

御所とよばれた。晩年には大映社長にも就任した。

*

ぼくが菊池寛の名を知ったのは、中学生になってからだだろう。父の蔵書に改造社版の現代日本文学全集があり、それは一九二〇年代のいわゆる円本ブームのさきがけとなったシリーズで、その名残りとして、読書人でもない父の部屋の押入れの中に積まれていたのだが、第三十一巻が菊池寛集であった。八つの短篇小说、五つの戯曲と長篇小説『真珠夫人』が収められている。

いずれも面白く読んだ覚えがあるが、とりわけ『真珠夫人』で強烈な刺激を味わった。それは性器が勃起するのを意識しながら読むのはじめてのものであった。秘められた扉から胸をときめかせて覗くベッドシーンを伴った極彩色の甘美なドラマとして、その印象は永くぼくの心にあった。

最近になって、ぼくと同じような経験を持つ人を見出した。俳優であり、画家でもある米倉斉加年が、朝日新聞紙上に、忘れられない本として、この『真珠夫人』を挙げていたのである。子供にとって、それは神秘的な大人の世界であり、性的な言葉をさがしてページをめくり、その読書は罪悪感をもって心の中にしまいこまれた、と彼は書いている。

いまあらためて『真珠夫人』を読んでみると、極彩色どころか、むしろ牧歌的な感じがす

るほどの純情恋愛小説である。性的な言葉など出てはこないし、ベッド・シーンだつてないのである。そこに性的なものを求め、感じたのが、まさしくぼくたちの少年時代であつた。現在の中学生や小学生が読んでも、そのような刺激を感じることはないだろう。

やはり、時の流れというものはある。人間は、その流れに棹さかさすにしろ、逆らうにしろ、いずれにしろ時の流れに乗って生きている。文学、そしてその他の人間の営みもそうである。

ぼくは菊池寛を忘れはしなかった。通俗小説、ファンであつたぼくは、十代の後半に、彼の主な長篇小説をはじめ、明治から昭和初期にかけての、通俗小説、をかなり読んだ。二十歳を過ぎてから、ぼくは菊池寛の読者ではなくなった。彼はすでに死んでいた。しかし、彼を忘れることはなかった。

たまたま、ぼくは菊池寛が創業した出版社に就職した。彼にあこがれていたから、というわけではない。彼を忘れていたわけではないが、それはむしろ過去の記憶となっていて、あらためて関心を持つことはなかった。

ところが、一九七七年の春、長年の友人である大野進が、彼の経営するたいまつ社の出版企画として、「菊池寛評伝」というテーマをぼくにもたらしした。まったく突然であつた。いま、なぜ、菊池寛が問題になるのか、といぶかしく思った。

与えられたテーマを巧みにこなすことが、編集者あるいは記者の職能である。とはいえ、とりわけ関心のないテーマをおいそれと引き受けるのには抵抗を感じる。関心がないのに、というより、だからこそこえって心を用いることなく気楽に仕事をしているジャーナリストに対する批判の気持もある。

しかし、菊池寛はぼくにとって無縁の存在ではなかった。かつてぼくは彼の読者であったし、現に編集者としての彼の後輩である。とらえどころのない、魅力あふれる人物であったという話も耳にしている。資料もいろいろある。ではひとつ取り組んでみようか、と思いついた。

ただ、ぼくには菊池寛自身に対する興味は乏しい。だから、伝記を書くつもりはない。書こうとしても、彼の内心をたどることは到底できそうもない。文章や行動にあらわれた結果を見るにとどまるだろう。もっとも、それをどのように見るか、という点が問題であって、それはむしろぼく自身が問われるところである。

結局、彼の人物、彼の仕事、彼の生き方によって、ぼくが触発されたところのもの、いわば菊池寛をダシにしてぼく自身を表現することになるだろう。二十世紀前半という、世界が激しく動いた時代に生きた菊池寛というたぐいまれな人物の足跡は、ぼくに多くのことを教えるし、また、それは現在に生きるぼくたちにとって、決して無縁なものではないだろう。

1 逸話の人

●——貧乏と貧乏感

菊池寛は逸話の人である。逸話はすべて彼の性格にもとづく。その逸話はまた彼の性格を増幅して、後の世に伝える。

彼の生きた姿に接した人と、活字を通してしか接していない人とは、そこにかたちづくられる人間像にずれがあるだろう。しかし、結局において歴史は活字のものである。まして、彼は文章を書くことを業とし、印刷媒体の世界に終始した。

菊池寛は一八八八年（明治二十一年）、香川県高松市で生まれた。同じ年、パリの下町では、アルコール中毒の男を父として、モリス・シュバリエが生まれている。

次の年、一八八九年、ロンドンではミュージックホールの芸人を父としてチャールズ・チ

ヤップリンが、そして、オーストリアのプレスラウでは、下級税関吏を父としてアドルフ・ヒトラーがこの世の人となっている。

菊池寛の父は旧士族であり、小学校の庶務係をしていた。八円ほどの月給で七人の家族をかかえていたから、むろん貧しい。菊池寛はずいぶん情けない思いやみじめな経験をしただろう。教科書が買ってもらえないので、友達のを借りて写したりもした。

③ あるとき、友達といっしょに縁日をひやかしていた。植木屋があった。値段を聞いてみた。五銭だという。寛には買う意思はまっぴらなかつたから、先方で負けられないようにと思つて、「五厘にしろ！」と言つた。ところが、どういふわけか五厘にすると植木屋は答えたのだ。「寛には買う意思がないばかりか、五厘の金も持っていないかつた。だから、あわてて通りすぎようとした。植木屋はそういう寛を呼びとめて問責し、罵倒した。友達は「君どうして買わんのか」という。金がないことを白状して友達に五厘を借りることは、植木屋に罵倒されるよりも恥かしいことだつた。そのまま黙って通りすぎた。

《そのとき、私は自分で金を持っていない悲哀をつくづく感じた》と、菊池寛は書いている。だが、これは貧しさの悲哀というよりは、鼻っ柱の強さにもとづく情況判断がはずれ、友人に対する見栄を自覚したときの自己嫌惡の濃い悲哀だつたように、悍然は思われる。

一高時代。寄宿舎の便所に独和辞典が落ちていた。それを見つけた菊池寛は、棒切れを使

って引き寄せ、辞書を拾いあげた。水道の水で洗い、日向に出して乾かす。それからゆっくり手にとって、本を開いてみると、持主の名前が書いてあった。寛はさっそく持主のところを持ってゆくと、「たしかに自分のものだが、もういらないよ」という返事だ。便所に落したものをいままさら使う気はないのだろう。そこで寛が「では、これをばくにくれるかい？」と聞くと、「ああいいとも。」自由になん「どうもありがとう」というや、ただちに本郷通りの古本屋に売り渡し、なにがしかの金に代えた。

のちに菊池寛は「私の貧乏時代」というアンケートに答えて、この話は一高式の冗談半分であって、ほんとうに貧乏だったのは学生時代だと書いている。

《京都大学へ行ってからは、学資が足りないので困った。そこにはもう冗談がなかった。私が五日ばかり一文なしで困っていた時だった。京都大学内のテニスコートの中を通りかかると、五銭の白銅が落ちていた。雨に打たれたと見えて、少し赤くなっている。私はいったん行きすぎてから、それが気になって引き返した。そこまで私は覚えていた。何だか、それを拾い取って使ったような気がするのである。が、私の羞恥心が、使った方の記憶を努めて消し去ったと見えて、今では使ったか使わなしか覚えていないといっても邪しくないほど記憶が薄れている。むろん、私は学校を出てからも貧乏であった。結婚をするとき、帰国するのに三十円しか持っていなかった。木綿の着物とお祝いに送られた高貴の羽織が一枚あっただ

けである。新婚の妻は、私の見すばらしい姿を憫あわれんだと見え、帰京の途次名古屋で金縁の眼鏡を買ってくれた。十一円八十銭であった。……（中略）とにかく、貧乏というものは、記憶になつてしまつてもあまり愉快なものでない』

④ とはいふものの、菊池寛の貧しさは、所詮没落した中産階級の貧乏であつて、農漁村や都市の下層階級に見られる悲惨さとは貧しさの構造がちがう。菊池家は二百坪ほどの宅地に六部屋の家だったというし、多少の田地も所有していた。

だから、彼はその日その日の食事にもこと欠くという貧しさの中にいたのではなく、本来欲しいものが買え、望む道を行けるはずなのに、それができないという貧乏感の中で生活していた。彼にとつて貧乏は当り前ではなかった。貧乏という状態を客観視する態度は、ゆとりでもあつたが、心を傷つけることが深かつたであらう。

●——田舎者の秀才

彼が生まれた年に、東京上野の黒門町に、日本最初の喫茶店「可否茶館」が開店した。コーヒー一杯一錢五厘、牛乳一杯二錢であつた。銀座の風月堂では、アイスクリーンが発売され、また、キリンビールの発売もこの年である。

この一八八八年に流行したものは「帝国」だという。二年前に東京大学は東京帝国大学と

改称されているが、帝国英学院、帝国工業、帝国生命保険、雑誌『帝国の柱』そして、人力車は「帝国車夫」と名乗り、おわい屋の糞桶には「帝国掃除屋」と書かれるような有様だった。

この前年には、東京の丸善から初めて万年筆が発売されている。翌一八八九年（明治二十年）には帝国憲法が發布され、つづいて第一回総選挙、そして教育勅語が出される年を迎えるのである。

国家としての日本は、着々と近代化を進めつつあった。政治を動かす薩長政府のまわりには、さまざまな地域と階層の出身者による高級官僚群が形成されてゆく。

当時のエリート・コースは、いちおう能力主義によって貫かれていた。出身階層や家柄が低くても、大学に合格する能力と卒業するまでの学資を調達する力さえあれば、機会は均等であった。そこで、この時代には、涙ぐましい立身出世物語が続出することになる。

菊池寛はいたずら好きのわんぱく坊主だったが、学校の成績は良かった。

《私は学才のあるのを鼻にかけて先生を馬鹿にするといった性質で、おとなしい先生の教室などでは、よく悪戯いたずらをした。温厚な数学の先生のと看、私は三角形ABCの代りに、三角形イロハと書いた。近來の教科書にはイロハと書いたものが多く、珍しくもないが、しかし菊池大麓博士の教科書ばかり使っている当時、三角形イロハとかくことは、かなり素晴らしい

思いつきであると同時に、先生の権威に対する挑戦だった。クラスの連中は大喝采をすると同時に、先生は蒼くなってしまった。その先生は直接には何もいわなかったが、数学の主任の先生からは、ヒドく叱られた》

と『半自叙伝』に書いている。

彼は頭もよかったのだろうが、努力感なしに勉強に熱中することができたらしい。中学三年生のときに、英和辞典を全部暗記してしまったという。A、B、C……と、覚えるはしから、辞書のページを食べてしまったと伝えられている。

英会話の授業時間に、外人教師が生徒を一人ずつ指名し、夏休みの思い出を英語で喋らせたことがあった。ほとんどの生徒は指名にうろたえて二言三言ようやく英語らしいものを口にしたのだが、寛は訥々^{とと}とではあるが、三十分も喋った。それも夏休みに、満州^{マニウ}に旅行した話で、もちろんフィクションである。なにかの本で読んだ内容を即席にまとめたのだろうが、同級生だけではなく外人教師もこれには大いに感嘆したという。

その頃、高松市に図書館ができた。蔵書約二万冊。彼は毎日のように図書館に通い、少しでも興味のある本は全部借りて読んだ。

菊池寛の生涯は読書とともにあったといっているが、その端緒はここにある。彼は乱読主義だった。学問のための読書、修養のための読書、必要のための読書はいずれも労働にすぎ

ない。ただむさぼり読む読書こそが読書の楽しみだ、と彼は言っている。

彼が県立高松中学校を卒業し、授業料不要のうえ学資給与の特典があるというので、東京高等師範学校を受験、合格して上京したのは、一九〇八年（明治四十一年）である。

上京当時、そば屋に行くと「もりかけ三銭」と書いてあった。それが「もり、かけ各三銭」だという意味を知らなかったので、寛はかなり長い間「もりかけをください」と注文していた。たいてい、かけが出てきた。

はじめて上野の料理屋にあがった。メニューを見ると「わんもり八銭」というのがいちばん安い。それを注文した。女中が「わんもりだけでよろしいのですか」とたずねる。うなずくと、女中は奇妙な顔つきをして去った。しばらくして持ってきたものは汁椀だけだった。東京では汁椀のことをわんもりというのだった。

東京高師に入学して、いちばん困ったのは、英語の発音だった。先生は岡倉由三郎で、かなりの皮肉屋だった。寛は英語が得意で、少なくとも理解力にかけては並ぶものがないという自信を持っていたが、もともと音感が悪い上に、田舎の中学での英語授業は発音などいいかげんだっただろう。

高師は一年で除名された。教科書を持たずに教室に出たり、学校を休んで芝居を見に行ったり、授業をすっぽかしてテニスをしたりなど、学校当局からすれば目に余る行為であった。

●——友情とあきらめ

やがて、第一高等学校に入学した。芥川龍之介、久米正雄、松岡譲、成瀬正一、恒藤恭、佐野文夫、土屋文明、山本有三などを、同級生として識ることになる。一九一〇年（明治四十三年）である。

この年、日本は韓国を併合し、また、天皇暗殺を計画したという理由で幸徳秋水たちが処刑された、いわゆる大逆事件の検挙が始まっている。東京市には初めてアパートが登場した。一高卒業を前にして、菊池寛はまたも一高を退学しなければならなくなる。友人の罪を一身に引き受けたのである。

親友の佐野文夫がデートをするために友達からマントを借りてきた。それから二日ぐらいして、金がなくなつたので、そのマントを質草にしようということになった。質屋に持って行つたのは寛である。ところが、マントは借りたものではなく、佐野が他人の持ち物をだまつて使つたのだ。佐野には盗癖があつた。

ふだんマントなど着たことのない寛が、それを着て白昼堂々と校門を出て行つたのだから、目立たないわけがない。質屋が調べられ、たちまち盗品であることが分つてしまった。寛は寮務室に呼ばれたが、佐野はそのとき外出していた。そこで、寛は仮りにその罪を引き受け